

## 縄文時代のお墓から見る、お墓の存在理由

みなさんにとって、お墓とはこういった存在でしょうか？

お墓はご先祖さまや大切な人が眠る「かけがえのない存在」と捉える方がいる一方で、「お墓は維持管理が大変だから必要ない」「子供に迷惑をかけたくないからお墓はつくらない」という意見の方や、「お墓は不要」とまで考えられる方がいらっしゃいます。

その背景には、家族のあり方や人生観、死生観の変化などがあるのかもしれませんが。しかしながら、**日本人には大切な家族のお墓を守り、お墓に手を合わせてきた歴史があります。**そして、そこには明確な「お墓の存在理由」がありました。



### では、その原点は一体どこにあるのか？

現代のように誰もがお墓を建てるようになった大正時代？

お墓を建てる文化が庶民にも根付いた江戸時代？

有力者のみが死後お墓へと納められた昔の日本？

実はそのどの時代でもなく、お墓文化の原点はそのさらに昔からあったと思われます。現代の「お墓文化」に通じる遺跡として挙げられるのが青森県青森市にある「三内丸山(さんないまるやま)遺跡」です。

**今から約5900年前～4200年前の縄文時代の集落跡です。**



### 三内丸山遺跡で見つかったお墓の特徴

三内丸山遺跡には、集落、まつりの場所、物をしまう場所、貯蔵する場所、ゴミ捨て場などがありましたが、お墓にも大きな特徴がありました。



集落には、海に向かって延びる幅約12m、長さ約420mの道路があり、お墓が並んでいたのはその両側です。その配置は、道路をはさんで東西2列、向かい合うようになっていました。

ひとつは、約500基の大人の墓地群です。大きさが1～2.5mの楕円形の穴に手足を伸ばして埋葬されたと考えられています。

もうひとつは、800基以上にもおよぶ子供の墓地群です。子供の場合、普段使っている土器の中に遺体を入れ埋葬していたようです。

## 三内丸山遺跡のお墓から想像できること

三内丸山遺跡が発掘されるまでは、お墓や埋葬に関する見解は、「遺体は集落から遠い場所でまとめて棄てていた」といったものでした。

しかしながら、ここで見つかったお墓は、住居のある位置からほど近い、大きな道路に沿って並んでいました。

また、**1体ずつ丁寧に埋葬していた跡も見つかり、その近辺では、花や木の実、魚の骨なども出土しています。**

この状況から、現代の「お墓文化」と通じる、次のようなことが見えてきます。

- ・死者を大切に埋葬していたこと
- ・死者に対しても生きている人と同様に親しみを持っていたこと
- ・お墓にお供物をしていた可能性があること

医療が整った現代と比べ、縄文時代の暮らしはきっとリスクの多い時代で、「生きる」ことの大変さは、今よりももっと大きかったと想像します。そのため、三内丸山遺跡では子供の墓が800基以上あったのでしょうか。成人することが決して当たり前ではなかった時代です。

だからこそ、**彼ら縄文人は、死者を身近なところで大切に埋葬し、親しみを持って接していた**のではないかと思います。

- ・家族や近い人たちへの感謝。
- ・生きていくことへの感謝。
- ・子孫のしあわせ。

そういったことを、死者を埋葬した土坑、つまりはお墓を通して日々感じて生きていたのかもしれませんが、お墓に向かって手を合わせる習慣こそなかったとは思いますが、きっと**縄文人もお墓参りのようなことを行い、先人と子孫による“しあわせの交換”をしていた**と想像します。

子孫が先人に“感謝の気持ち”を伝え、先人が“子孫のしあわせ”を守る…縄文時代から、お墓は“しあわせのシンボル”として、存在していたのかもしれませんがね。

## その縄文時代から時代は大きく進み、現在は「令和」です。

縄文時代から繋がってきた命は、この令和の世にも受け継がれ、そして今の私たち、さらには子孫へと繋がっていきます。考え方によっては、受け継がれてきたバトンの数が多い現代の方が、縄文時代より「お墓の存在」は大きくなっているのかもしれませんが。

ぜひ、家族揃ってお墓の前で手を合わせ、お墓を介してはるか遠いご先祖さまとの“しあわせの交換”をしていただければと願います。

